

学会講演会のありかた

日本気象学会では春と秋に大会が開催され、研究発表とシンポジウムが行われている。最近の発表では OHP の文字が小さかったり、多くの枚数を次々と投影する者がいて、聴衆には理解できない。また、発表時間が短くなったせいか、内容の希薄な発表が増えた。内容の希薄な発表はまとめて次回に回すべきであろう。開始したばかりの研究で意見を聴きたいものは「ポスター発表」とすれば、十分時間がとれる。「最近は、よくない発表が多くなった」と歎く人々もいる。予稿集の行数の上限も厳しく守らせるなど、講演企画委員会がもう少し指導性を持ってよいのではないか。ひと昔まえの「スライド投影」の時代には、枚数制限などの指導があった。また、座長の権限を強化すべきだろう。

1. 発表者の心掛け

講演者は聴衆の立場にたつ心掛けを持とう。

(a) 発表時間を t 分、OHP (スライドも含む) の枚数を N 枚としたとき、 $N \leq t$ とすること、 $N \approx 0.8t$ 程度が適当である。

(b) OHP の文字は 15 mm 以上、下付き文字などでも最小 10 mm 以上の大きさで書き、最大 15 行を越えてはならない。広い会場の場合には 20 mm 以上の大きさで 10 行以内とすること。聴衆の大部分に読める OHP 原稿を作成しなければならない。

特に、シンポジウムの講演者の中に、論文のコピーをそのまま投影する者がいるが、これはよくない。原論文の図の周囲の文章はコピーに入れない。編集をして簡潔な説明文を大きな文字で入れる。縦軸と横軸の記号も新たに大きな文字で加筆する。大会シンポジウムの聴衆は広範囲分野の研究者であるので、内容と量はあまり欲張らない。大多数が消化不良ではよくない。

以上の条件が揃っているかどうかは、事前に、講演者に対し問診表により自己チェックさせる。

2. 会場の設営

講演者の中には、OHP 投影機面に置いたシートだけを見て、スクリーンにどの部分が写っているかを知らないで発表する者が相当数いる。会場ディレクターは、A4 版のシート全面がスクリーンに入るように投影機とスクリーン間の距離を設定する。これが不可能な場合には、「○会場では、縦□□cm×横□□cm の面積しか投影できない」ということをあらかじめ公表しておく。また、その大きさの外枠を投影機面に貼っておけば、講演者によく分かる。講演者はそれにしたがって OHP の原稿を準備できる。

投影機の光量とスクリーンの広さは会場の広さと聴衆の数にふさわしいものを用意する。そのレンタル料がかさむ場合は参加費を多くとる。予算と貴重な時間を費やして参加した大多数の聴衆にスクリーンの文字が見えないのはよくない。

天井が低い会場の場合、シンポジウム表題の看板は横書きでなく、縦書きのものをスクリーンの右側に、話題提供者の題名も縦書きとしスクリーンの左側に置く。従来例では、シンポジウム表題の看板が OHP 投影中のスクリーンに邪魔になる場合があった。

話題提供者の座席は聴衆から見て邪魔になる場所には設置しない。1人が発表中のときは他の者は一般座席の最前列にいる等の工夫があってもよい。

大会委員長のほか、実質的な会場ディレクター等の氏名も予稿集プログラムに公表しておけば、責任の所在が明確となる。

講演企画委員会では具体的な「マニュアル」を作成し改訂しながら、次期委員会に引き継いでいくがよい。その要点は、講演発表申し込み案内と予稿集に明記されたい。(東北大学理学部 近藤 純正)